

タイトル：主語名詞句からの前置詞句外置構文—用法基盤モデルによる分析

著者：平塚 徹

要旨：

本稿は、フランス語の主語名詞句から前置詞句が右方に現れる前置詞句外置構文を、用法基盤モデル (usage-based model) の観点から分析するものである。従来、この構文は主として生成文法において英語を対象に研究され、主語名詞句内部からの前置詞句の移動として説明されてきた。しかし本稿は、構文を抽象的な統語規則の産物としてではなく、語彙と結びついた使用パターンとして捉える立場から、フランス語の外置構文の実態を明らかにする。

約 3700 万語からなるコーパス Corpatext を用いて、特に動詞 venir と前置詞 de を伴う外置構文を中心に調査した結果、出現する主語名詞や構文パターンには著しい偏りがあることが明らかになった。主語名詞としては idée や moment など少数の語が高頻度で現れ、特に《L'idée me/lui vint de + 不定詞》や《Le moment est/était venu de + 不定詞》といった表現が定型表現として定着していることが確認された。これらの表現を中心として、語彙の置換や限定辞の変化などによる低頻度の変異形が派生していると考えられる。また、思考や感情を表す名詞が主語となる場合には経験者を示す間接目的語代名詞を伴う傾向があり、時を表す名詞が主語となる場合にはそれが現れないなど、語彙意味と構文的振る舞いとの対応関係も確認された。

さらに、《l'envie me prit de + 不定詞》のような類似の定型表現や、《La tentation est grande de + 不定詞》のように量や程度を表す述語を伴う外置構文についても概観した。以上の分析から、フランス語の前置詞句外置構文は抽象的な構文規則から一様に生成されるものではなく、高頻度の語彙的パターンを中心とする定型表現のネットワークとして組織されていることが示される。本稿の結果は、外置構文の実態が用法基盤モデルの枠組みによってより適切に説明できることを示唆するものである。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

平塚徹 (2016) 「主語名詞句からの前置詞句外置構文—用法基盤モデルによる分析」 東郷雄二・春木仁孝 (編) 『フランス語学の最前線 4【特集】 談話、テキスト、会話』東京：ひつじ書房, pp.237–265

主語名詞句からの前置詞句外置構文
用法基盤モデルによる分析

平塚 徹

1. はじめに

本稿が対象とするのは、フランス語の外置構文である。特に主語名詞句から前置詞句が右方へと移動したと見なすことができる構文を扱う。このような構文は、もともと生成文法において英語を対象に取り上げられてきた (Radford (1988:448-456, 601))。例えば、(2) は、(1)の主語名詞句の中にある前置詞句 *of my latest book* が抜き出され、右方に移動して派生したと考えることができる。

- (1) [A review *of my latest book*] has just appeared (Radford 1988: 448)
(2) [A review -] has just appeared *of my latest book* (ibid.)

しかし、これが移動ではないという議論もある (Culicover and Rochemont (1990)、Hunter and Frank (2014))。本稿は生成文法に依拠しないので、外置構文が移動により生ずると考えるものではない。生成文法では、構文は原理に基づく統語演算の随伴現象とみなされてきた。しかし、本稿は、構文に言語単位としての存在意義を認める構文文法的な立場に立っている (Croft and Cruse (2004))。そのため、上でも、「移動したとみなすことができる」と述べた。よって、動詞よりも右方にある前置詞句が主語名詞から離れているにもかかわらず、それを修飾していると解釈される構文と規定すべきである。

英語においては、外置構文を焦点や情報の重要度によって説明する研究もある (Huck and Na (1990)、Takami (1990)、Takami (1992) など)。しかし、Göbbel (2013) は外置された前置詞句が焦点でない場合もあるとしている。

このように英語においては外置構文は盛んに取り上げられてきたが、それに比べると、フランス語では外置構文についての研究は少ない (生成文法による Sportiche (1981) や Gunnarson (1982)、木接合文法 (tree-adjoining grammar) よる Abeillé (1994) ぐらいである) ¹。本稿は、フランス語の前置詞句外置構文を扱うが、従来の外置構文の研究とは異なり、用法基盤モデル (usage-based model) によってその実態を解明する。

記述の経済性を重視する言語理論においては、規則によって予測可能なことからは理論から排除される。よって、特定の語彙項目を含む表現が、それを含まない一般的なパターンの具体例として説明されるのであれば、その表現は理論から排除されることになる。外置構文なら、特定の主語名詞や動詞を含む表現が、外置構文の一般的なパターンの具体例として説明されるのであれば、そのような表現は理論から排除されるのである。

しかし、Langacker (2000) は、このような考え方を、「規則とリストの誤謬」 (rule/list fallacy) と呼んで批判している。用法基盤モデルにおいては、より一般的な規則から予測される表現であっても、使用頻度の高いものは定着しており、規則に還元されずに話者の言語知識を構成するものとされるのである。

本稿では、フランス語の前置詞句外置構文は、用法基盤モデルに極めて合致するものであることを示す²。コーパスから採集した前置詞外置構文の実際の用例を観察すると、特定の語彙項目を含んだ特定のパターンのものが極めて高い頻度で生起している。このことは、前置詞句外置構文という抽象的なパターンが具体的な語彙項目とは独立に存在しているのではなく、前置詞句外置構文の中で使用頻度の高い特定の表現が定型表現として定着していることを意味している。そして、そのような定型表現に基づいて、それとは少しずつ異なるさまざまな変異形が低頻度で生じているのである。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、動詞が *venir* で前置詞が *de* である前置詞句外置構文を見ていく。第3節では、それ以外の前置詞句外置構文に触れる。第4節では、本稿のまとめと今後の課題を述べる。

2. 動詞が *venir* で前置詞が *de* である前置詞句外置構文

フランス語の前置詞句外置構文を見てみると、動詞が *venir* で前置詞が *de* のものが目につく。そこで、このパターンの前置詞句外置文をコーパスから採集した。使用したコーパスは、パブリックドメインにある文学作品やその他のジャンルの書き言葉の 2700 テキストからなる *Corpatext 1.02* (約 3700 万語) である³。このコーパスで《*venir* の 3 人称単数形 + *de/d'/du/des*》という文字列を検索し、外置構文になっている文を採集した。その結果、合計 225 の外置構文が採取できた。

2.1. 主語名詞

採取した外置構文の主語名詞の出現頻度は表1の通りである。

表1 主語名詞

主語名詞	頻度	主語名詞	頻度
<i>idée</i>	59	<i>apparition</i>	1
<i>moment</i>	52	<i>convoitise</i>	1
<i>heure</i>	28	<i>espoir</i>	1
<i>temps</i>	18	<i>honte</i>	1
<i>pensée</i>	12	<i>impatience</i>	1
<i>tour</i>	12	<i>instant</i>	1
<i>envie</i>	5	<i>mode</i>	1
<i>souvenir</i>	4	<i>occasion</i>	1
<i>besoin</i>	3	<i>paresse</i>	1
<i>dégoût</i>	3	<i>peur</i>	1
<i>ère</i>	3	<i>pitié</i>	1
<i>ordre</i>	3	<i>projet</i>	1
<i>âge</i>	2	<i>résolution</i>	1
<i>désir</i>	2	<i>soupçon</i>	1

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

habitude	2	tentation	1
mépris	2	総計	225

出現する主語名詞は著しく偏っており、全体で 31 個の名詞のうち上位の 6 個で 80%以上 (225 回中 181 回) を占めている。

1 位の *idée* を主語名詞とする文は、基本的に、何かをすることを思いついたことを表している。

- (3) *L'idée lui vint de convoquer les capitaines* (Gustave Flaubert, *Salammbô*)
(The idea came to him to summon the captains)
(彼は隊長たちを招集することを思いついた。)

この表現は、思考が生じることをその思考がやってくることに見立てるメタファーに基づいており⁴、動詞 *venir* は物理空間内での移動という本来の意味では用いられていない。

同じことは、類義語である 5 位の *pensée* にも当てはまる。

- (4) *C'est alors que la pensée me vint de m'embarquer pour Paris.*
(Alphonse Daudet, *Le Petit Chose*)
(It was then that the thought came to me to board for Paris.)
(私がパリに行く船に乗ることを思いついたのはその時だった。)

2 位の *moment* は時を表す名詞であるが、これを主語名詞とする文は、基本的に、何かをする時になったことを表している

- (5) *Le moment était venu de quitter cette île inhospitalière.*
(Jules Verne, *Les Cinq cents millions de la Béguin*)
(The moment had come to leave this inhospitable island.)
(このもてなしの悪い島を離れる時が来ていた。)

この表現は、ある時になったことを、その時が未来からやってきたものとして理解する MOVING TIME METAPHOR (Lakoff and Johnson, 1999) に基づくものである。

同じことは、3 位の *heure* と 4 位の *temps* にも当てはまる。

- (6) *L'heure est venue de résoudre une difficulté* (Gilles Deleuze, *Leibniz*)
(The time has come to solve a difficulty)
(困難をひとつ解消する時が来た。)
- (7) *Amis, dit-il, le temps est venu de quitter la vie*
(François René de Chateaubriand, *Etudes historiques*)
(Friends, said he, the time has come to leave life)

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

(友人たちよ、と彼は言った。この世を去る時が来た。)

pensée と同じく 5 位の tour は順番を表す語である。

- (8) Enfin, son tour était venu d'être le maître. (Emile Zola, *Pour une nuit d'amour*)
(Finally, his turn had come to be the master.)
(やっと、彼が主人になる番が来ていた。)

これは、何かをする順番が巡ってきたことを表しているが、これは tour を主語名詞とする文の全てに当てはまる。

それ以外の主語名詞は、頻度は下がるが、思考や感情、あるいは、時に関わる名詞が多い。つまり、高頻度の名詞を中心にして、その周りに意味的に類似した低頻度の名詞が集まっているという構造をなしているのである。そして、動詞 venir は、物理空間内での移動という本来の意味ではなく、比喩的な意味で用いられている。

2.2. 限定辞

主語名詞につく限定辞は定冠詞が圧倒的に多く、それ以外の限定辞は少ない (表 2)。

表 2 限定辞

限定辞	頻度	限定辞	頻度
定冠詞	189	指示形容詞	4
不定冠詞	16	無し	2
所有形容詞	14	総計	225

主語名詞ごとに限定辞の頻度を調べたところ、表 3 のようになった。

表 3 主語名詞と限定辞

主語名詞	定	不定	所有	指示	無し	頻度
idée	54	1		4		59
moment	52					52
heure	26		2			28
temps	18					18
pensée	12					12
tour			12			12
envie	4	1				5
souvenir	4					4
besoin	2	1				3

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

dégoût	1	2				3
ère	3					3
ordre	1			2		3
âge	2					2
désir		2				2
habitude	2					2
mépris	1	1				2
apparition		1				1
convoitise		1				1
espoir	1					1
honte		1				1
impatience		1				1
instant	1					1
mode	1					1
occasion	1					1
paresse		1				1
peur		1				1
pitié		1				1
projet	1					1
résolution	1					1
soupçon		1				1
tentation	1					1
総計	189	16	14	4	2	225

ordre が限定辞無しで 2 回出現しているが、ひとつは古代ギリシア語で書かれた『ダフニスとクロエ』を 16 世紀にフランス語に翻訳したもの、もうひとつはジャン・ド・ラ・フォンテーヌ（17 世紀）の韻文であり、いずれも古語法である⁵。

- (9) De là à deux jours *ordre* lui vint de recevoir les restitutions, et s'en retourner sans faire nul dommage. (Longus, *Daphnis et Chloé*)
 (Two days later [the] order came to him to receive the returns, and go back without doing any damage.)
 (二日後、返還品を引き取り、一切の損害を与えることなく帰還せよという命令が彼に came。)
- (10) *Ordre* lui vient d'aller au fond de la Norvège (Jean de la Fontaine, *Les Souhairs*)
 ([The] order came to him to go deep into Norway)
 (ノルウェーの奥深くまで行けとの命令が彼に came。)

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

指示形容詞は主語名詞 *idée* と出現しているが、59 例中 4 回であり、頻度は多くない。

所有形容詞は合計 14 回出現しているが、そのうち 2 回は *heure* と、12 回は *tour* と共起している。しかも、*tour* はその全ての生起において、所有形容詞と共起している。つまり、*tour* と所有形容詞は互いに強く結びついているのである。*tour* を主語名詞とする外置構文は、誰かが何かをする順番が巡ってくることを表しているのである。

全体的には、出現頻度の高い主語名詞においては、定冠詞がつくことが圧倒的に多い。不定冠詞はむしろ頻度の低い主語名詞において散発的に現れている。それ以外の限定辞に関しては、極めて偏った生起をしている。このことは、高頻度のところでは特定のパターンが安定的に現れるのに対して、低頻度のところではパターンの変動が大きくなるということだと考えられる。

2.3. 外置句

外置されている句（以後、外置句）において前置詞 *de* のあとに来ている範疇を調べたところ、表 4 のようになった。

表 4 外置句

範疇	頻度
不定詞句	194
名詞句	31
総計	225

総数のうち約 86%が不定詞句であった。一般的には、前置詞 *de* に後続する範疇としては名詞句の方が多いと考えられるので、これは極めて特徴的である。

主語名詞ごとに、前置詞 *de* のあとに来る範疇を集計したものが表 5 である。

表 5 主語名詞と外置句

主語名詞	不定詞句	名詞句	計	主語名詞	不定詞句	名詞句	計
<i>idée</i>	58	1	59	<i>apparition</i>		1	1
<i>moment</i>	49	3	52	<i>convoitise</i>	1		1
<i>heure</i>	23	5	28	<i>espoir</i>	1		1
<i>temps</i>	17	1	18	<i>honte</i>		1	1
<i>pensée</i>	11	1	12	<i>impatience</i>		1	1
<i>tour</i>	12		12	<i>instant</i>	1		1
<i>envie</i>	5		5	<i>mode</i>	1		1
<i>souvenir</i>		4	4	<i>occasion</i>	1		1
<i>besoin</i>	3		3	<i> paresse</i>	1		1
<i>dégoût</i>		3	3	<i>peur</i>	1		1

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

ère		3	3	pitié		1	1
ordre	3		3	projet	1		1
âge	1	1	2	résolution	1		1
désir	1	1	2	soupçon		1	1
habitude	2		2	tentation		1	1
mépris		2	2	総計	194	31	225

出現頻度の特に高い主語名詞については、不定詞句が圧倒的に多い。主語名詞が *idée* と *pensée* の場合には、(3)や(4)のように、不定詞句で表された行為を行うという考えが思い浮かんだことが表されている。前置詞 *de* の後が名詞句だったのは、*idée* も、*pensée* も、それぞれ 1 例だけだったが、いずれも何かを思い出したことを表している。

- (11) et, comme elle serrait les nœuds, l'idée lui vint de Saccard, qu'elle savait en Hollande, lancé de nouveau dans une affaire colossale, le dessèchement d'immenses marais, un petit royaume conquis sur la mer, grâce à un système compliqué de canaux. (Emile Zola, *L'Argent*)

(and, as she tied the knots, the idea came to her of Saccard, whom she knew to be in Holland, launched again into a colossal enterprise, the draining of immense marshes, a little kingdom conquered from the sea, by a complicated system of canals.)

(そして、結び目を締めている時に、彼女はサッカードのことを思い出した。彼がオランダにいて、再び大規模な事業に乗り出していることを彼女は知っていた。複雑な水路システムによって、広大な湿地を干拓し、海上に小さな王国を手に入れようというのだ。)

- (12) Mais, brusquement, la pensée lui vint d'une tranchée profonde, qui se trouvait à trois cents mètres environ de la Croix-de-Maufras (Emile Zola, *La Bête humaine*) (But, abruptly, the thought came to him of a deep cutting, which was about three hundred meters from La Croix-de-Maufras.)

(しかし、彼は、突然、クロワ＝ド＝モフラから約三百メートルのところにある深い溝のことを思い出した。)

主語名詞が *moment*、*heure*、*temps* の場合には、(5)～(7)のように、不定詞句で表された行為を行う時になったことが表されている。名詞句の場合は少ない。それぞれひとつずつ例をあげる。

- (13) Le moment est venu des vulgarisations (Paul Claudel, *Votre face, Seigneur...*)
(The time has come of the popularization)
(普及の時が来た。)

- (14) L'heure est venue des explications publiques.

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

(Auguste Blanqui, *Mes calomniateurs*)

(The time has come of public explications.)

(公に説明する時が来た。)

- (15) Le temps était venu des sept maigres génisses. (Alfred de Vigny, *Les Destinées*)

(The time had come of the seven thin heifers.)

(七頭のやせた雌牛の時が来ていた。)

名詞句の場合でも、(13)や(14)のように何かをする時になったことを表す場合が多い。(15)は例外であるが、これは韻文で、最後の語 *génisses* を次の行の最後の語 *auspices* と押韻させるために前置詞句を外置した特殊な例と考えられる⁶。

その他の主語名詞の場合も、前置詞 *de* のあとは圧倒的に不定詞句が続くが、名詞句が続くものとしては、*souvenir* (4 例)、*dégoût* (3 例)、*ère* (3 例) が目につく。

主語名詞が *souvenir* の場合は、名詞句の指示対象を思い出すことを表している

- (16) Et, tout d'un coup, le souvenir lui vint de son cousin Barral, sous-chef de bureau à la Marine. (Guy de Maupassant, *La Dot*)

(And, suddenly, the memory came to her of her cousin Barral, deputy chief clerk of the Navy.)

(そして、彼女は突然いところで海軍で事務次長をしているバルルのことを思い出した。)

- (17) Alors le souvenir lui vint de Mme de Marelle (Guy de Maupassant, *Bel-Ami*)

(Then the memory came to him of Mrs. de Marelle)

(その時、彼はド・マレル夫人のことを思い出した。)

- (18) Et le souvenir lui vint d'une petite bonne de brasserie ramenée un soir chez elle et revue de temps en temps. (Guy de Maupassant, *Pierre et Jean*)

(And the memory came to him of a little barmaid, whom he had taken to her home one evening and seen from time to time.)

(そして、彼は、ある晩に家まで送ってあげてから時々会っている居酒屋の女給仕のことを思い出した。)

- (19) Et tout à coup le souvenir lui vint de ce qu'avait dit Marowsko la veille

(Guy de Maupassant, *Pierre et Jean*)

(And suddenly the memory came to him of what Marowsko had said the day before)

(そして、彼は、突然、マロウスコが前日に言ったことを思い出した。)

これらは、4 例とも全て、モーパッサンの小説に出てくるものである。さらに *souvenir* を主語とし *vint* を動詞とする文を検索し、外置構文を探したところ、(20)の 1 例が見つかったが、これもモーパッサンの用例であった (*vint* と *du* の間に副詞 *aussitôt* が割り込んでいるために、先の調査には入っていない)。

- (20) Le souvenir me vint aussitôt du tic violent de sa main

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

(Guy de Maupassant, *Le Tic*)

(The memory came to me immediately of the violent tic of his hand)

(私はすぐに彼の手の痙攣のことを思い出した。)

これらの用例は作家の個人的文体であると言える。

dégoût の 3 例についても、2 例がゾラの小説のものであり、文体的に偏ったものである可能性が高い。

ère の 3 例はある時代の到来を述べるものであるが、3 例とも全て、スターリンの『十月革命の国際的性格』という文章のフランス語訳に出てくるものであり、かなり特殊な表現であると言える。

- (21) L'ère est venue des révolutions libératrices dans les colonies et les pays dépendants, l'ère du réveil du prolétariat de ces pays, l'ère de son hégémonie dans la révolution.

(Joseph Staline, *Le Caractère international de la révolution d'Octobre*)

(The era has come of liberating revolutions in the colonies and dependent countries, the era of the awakening of the proletariat in those countries, the era of its hegemony in the revolution.)

(植民地や従属国での解放革命の時代が来た。これらの国々でのプロレタリアートの覚醒の時代が、革命における彼らのヘゲモニーの時代が。)

- (22) L'ère est venue de l'effondrement du capitalisme. (ibid.)

(The era has come of the collapse of capitalism.)

(資本主義の崩壊の時代が来た。)

- (23) L'ère est venue de la domination du léninisme et de la III^e Internationale. (ibid.)

(The era has come of the domination of Leninism and of the Third International.)

(レーニン主義と第三インターナショナルの支配の時代が来た。)

この文章は 4 節からなっているが、(21)から(23)は、それぞれ、2 節から 4 節の各節の最後の締めくくりの文であり、翻訳者は特殊な表現を繰り返すことで文体的な効果を狙ったものと思われる⁷。

以上より、主語名詞が souvenir、dégoût、ère の外置構文において前置詞 de に名詞句が続く例が複数観察されるのは特殊な事例であると言える。

全体を概観すると、出現頻度の特に高い主語名詞については、外置句が《de＋不定詞句》のものが多く、頻度が下がってくると、《de＋名詞句》も出てくる。主語名詞につく限定辞と同様に、高頻度のところではパターンの安定性が見られるのに対して、低頻度のところではパターンの変動が出てくるのである。

2.4. 間接目的語代名詞

動詞が venir の外置構文は、間接目的語代名詞を伴っているものが少なからず見られる(表 6)。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

表 6 間接目的語代名詞

間接目的語代名詞	頻度	間接目的語代名詞	頻度
無し	119	leur	3
lui	65	vous	2
me	35	te	1
		総計	225

間接目的語代名詞を取るかどうかは、主語名詞に大きく依存している（表 7）。

表 7 主語名詞と間接目的語代名詞

主語名詞	有り	無し	計	主語名詞	有り	無し	計
idée	59		59	projet	1		1
pensée	12		12	résolution	1		1
envie	5		5	soupçon	1		1
souvenir	4		4	tentation	1		1
besoin	3		3	moment		52	52
dégoût	3		3	heure		28	28
désir	2		2	temps		18	18
mépris	2		2	tour		12	12
apparition	1		1	ère		3	3
convoitise	1		1	instant		1	1
espoir	1		1	mode		1	1
honte	1		1	occasion		1	1
impatience	1		1	ordre	2	1	3
paresse	1		1	âge	1	1	2
peur	1		1	habitude	1	1	2
pitié	1		1	総計	106	119	225

間接目的語代名詞が現れる場合は、思考や感情に関する名詞が主語名詞になっている。つまり、これらの外置構文は、特定の人間にある思考や感情が起こることを表しているのである。そして、その特定の人間が間接目的語として表されている⁸。これに対して、間接目的語代名詞が現れない場合は、ほとんど、何かをする時になったことを表している。

2.5. 活用

動詞 venir の活用については、単純過去、複合過去、大過去が多い（表 8）。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

表 8 活用

活用	頻度	活用	頻度
現在	3	複合過去	57
半過去	11	大過去	58
単純過去	65	前過去	6
単純未来	6	前未来	5
条件法現在	1	条件法過去	2
接続法現在	1	接続法過去	1
接続法半過去	3	接続法大過去	6
		総計	225

単純過去 65 例は、思考や感情に関する名詞を主語としているものが圧倒的に多い（表 9）。

表 9 単純過去の用例の主語名詞

主語名詞	頻度	主語名詞	頻度
idée	40	espoir	1
pensée	7	habitude	1
envie	5	pitié	1
souvenir	4	temps	1
besoin	1	ordre	1
dégout	1	tour	1
désir	1	総計	65

これに対して、複合過去や大過去などの複合時制 135 例においては、時に関する名詞を主語としているものが多い（表 10）。

表 10 複合時制の用例の主語名詞

主語名詞	頻度	主語名詞	頻度
moment	51	mépris	1
heure	27	instant	1
idée	18	mode	1
temps	16	apparition	1
pensée	4	occasion	1
tour	4	ordre	1
ère	3	paresse	1
âge	2	soupçon	1

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

désir	1	tentation	1
		総計	135

思考に関する名詞である *idée* が 18 回出てきているが、この名詞は単純過去では 40 回出現しており、比率としては少ない。

このような活用と主語名詞との相関は、特定の人間に思考や感情が起きたことは単純過去で表されやすいのに対して、何かをする時になったことは複合過去や大過去などの複合時制で表されやすいということを示していると考えられる。

2.4 で見たとおり、主語名詞は間接目的語代名詞の有無と相関を示すので、活用と間接目的語代名詞の有無も相関を示す（表 11）。

表 11 活用と間接目的語代名詞

活用	有り	無し	頻度	活用	有り	無し	頻度
現在	2	1	3	複合過去	12	45	57
半過去	11		11	大過去	15	43	58
単純過去	63	2	65	前過去		6	6
単純未来		6	6	前未来		5	5
条件法現在		1	1	条件法過去	1	1	2
接続法現在		1	1	接続法過去		1	1
接続法半過去	1	2	3	接続法大過去	1	5	6
総計					106	119	225

単純過去においては 2 例を除いて間接目的語代名詞があるが、複合過去や大過去のような複合時制においては間接目的語が無い方が多い。

2.6. *idée*

動詞が *venir* である外置構文では主語名詞としては *idée* が圧倒的に多いが、逆に主語が *l'idée* である外置構文ではどのような動詞が使われるのかを調べた。Corpatext で、《*l'idée* + 1～5 語 + *de/d'/du/des*》のパターンの文字列を検索し、その中から外置構文を採集した。

使われている動詞を集計したところ、*venir* が大部分を占めていた（表 12）。

表 12 *l'idée* を主語名詞とする外置構文の動詞

動詞	頻度	動詞	頻度
<i>venir</i>	64	<i>regaloper</i>	1
<i>prendre</i>	3	<i>s'imposer</i>	1
<i>hanter</i>	1	<i>tourmenter</i>	1
<i>pousser</i>	1	総計	72

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

それ以外の動詞の頻度は低かったが、いずれも何かの考えを抱くか、抱いていることを含意する動詞であった⁹。

- (24) l'idée le prit de visiter cet homme, car nul n'échappe à son destin.

(Auguste Villiers de l'Isle-Adam, *Contes cruels*)

(he came up with the idea to visit this man, for no one escapes his destiny.)

(彼はこの男を訪ねることを思いついた。というのも、誰も運命には逆らえないからだ。)

- (25) l'idée me hantait de ce corps décomposé, que je pourrais peut-être reconnaître pourtant. (Guy de Maupassant, *La Tombe*)

(I was haunted by the idea of this decomposed body, which I could perhaps recognize though.)

(この腐敗した体のことが頭から離れなかった。腐敗していても、たぶん私は彼女だと分かるだろう。)

また、全ての用例において目的語が存在し、考えを抱く人間を指示していた（表 13）¹⁰。

表 13 l'idée を主語名詞とする外置構文の目的語

目的語	頻度	目的語	頻度
me	30	à+NP	2
lui	30	le	1
vous	5	les	1
leur	2	nous	1
		総計	72

接辞代名詞でない間接目的語《à+名詞句》を取る例は 2 つある。(26)は名詞句が人称代名詞強勢形の lui である。これは動詞が代名動詞 s'imposer であるために接辞代名詞を用いることができずにこの形をとっているだけである。

- (26) Peu à peu l'idée s'impose à lui de vérifier dans la vie réelle la valeur de ces vieilles histoires. (Michel Tournier, *Jules Verne ou le bonheur enfoui*)

(Little by little he was obsessed by the idea to verify in real life the value of these old stories.)

(少しずつ、彼はこれらの古い話を実生活で確かめようという思いに取り憑かれていく。)

人称代名詞でない間接目的語が現れているのは、(27)だけである。

- (27) et tout de suite l'idée vint aux enfants d'entrer par la fenêtre, voir un peu ce qu'il y avait dans ce fameux moulin... (Alphonse Daudet, *Le Secret de maître Cornille*)
(and immediately the idea came to the children to get in through the window to see a little what there was in this famous mill...)
(そして、突然、子供たちは、窓から入ってこの話題の風車の中に何があるか、ちょっと、見てみようと思った...)

これを除くと他は全て人称代名詞を目的語としている。その中でも一人称単数の *me* と三人称単数の *lui* が群を抜いて多いが、これは *idée* を主語名詞とする前置詞句外置構文が通常焦点人物の心理を描いているためであろう。

外置句において前置詞 *de* に続くのはほとんど不定詞句であり、名詞句はまれであった(表 14)。

表 14 *l'idée* を主語名詞とする外置構文の外置句

範疇	計
不定詞句	69
名詞句	3
総計	72

以上より、《*L'idée me/lui vint de*+不定詞》というパターンの出現頻度が高く、焦点人物が何かをすることを思いついたことを表す定型表現として定着していると考えられる。そして、この表現に基づいて、以下のような変異により、他の表現が生じていると考えられる。

- (28) 主語名詞を思考や感情を表す他の名詞 (*pensée* や *envie* など) に替える。
(29) 主語名詞に付く限定辞を替える。
(30) 動詞を思考や感情を抱くことを含意する他の動詞 (*prendre* など) に替える。
(31) 前置詞 *de* の後を名詞句に替える。

2.7. moment

動詞が *venir* である外置構文の主語名詞としては、*moment* が *idée* に匹敵するほど多い。そこで、主語名詞が *le moment* である外置構文についても、用いられている動詞を調べた。*idée* の場合と同様に、Corpatext で、《*le moment*+1~5 語+*de/d'/du/des*》のパターンの文字列を検索し、その中から外置構文を採集した。

使われている動詞は、やはり、*venir* が圧倒的に多かった(表 15)。

表 15 *le moment* を主語名詞とする外置構文の動詞

動詞	頻度	動詞	頻度
<i>venir</i>	69	<i>paraître</i>	1

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

arriver	4	sembler	1
s'approcher	1	総計	76

arriver と s'approcher も venir と同様に到来を表している。

- (32) Cependant, Fauchery jugea que le moment était arrivé de risquer l'invitation au comte Muffat. (Emile Zola, *Nana*)

(However, Fauchery judged that the moment had arrived to dare to invite Count Muffat.)

(しかしながら、フォシュリーは思い切ってミュファ伯爵を招待する時が来たと思った。)

- (33) le moment s'approche de les aborder

(François-Joseph-Victor Broussais, *Cours de phrénologie*)

(The moment is approaching to tackle them)

(これらに取り組む時が近づいている。)

paraître と sembler が 1 例ずつあるが、それぞれ、動詞 venir と arriver の過去分詞 venu と arrivé を伴っている。

- (34) le moment lui parut arrivé de réparer son inconvenance

(Alexandre Dumas, *Les Trois Mousquetaires*)

(the moment appeared to him to have arrived to repair his impropriety)

(間の悪さを取り繕う時が来たように彼には思われた。)

- (35) Les Directeurs tenaient de nouveau un important symposium car le moment semblait venu d'expédier vers le passé un esprit solide qui, sans paradoxes ni perturbations temporelles, ferait juste un peu avancer les choses.

(Marcel Herzberg, *Les Mandalas*)

(The Directors were holding an important symposium again, for the moment seemed to have come to send to the past a strong individual who, without time paradoxes or time disturbances, would take things a little further.)

(指導者たちは再び重要な会議を開いていた。というのは、タイムパラドックスや時間の乱れを起こさずに状況を進めるような強い者を過去に送る時が来たように思われからだ。)

よって、どの例も、到来を表す表現が用いられている。

目的語については、間接目的語代名詞 lui を伴うものが 1 例あったが、これは(34)であり、lui は動詞 paraître の目的語である。それ以外は、目的語を伴う例はなかった。これは、全ての例において目的語を伴っている idée と全く逆である。考えは必ず誰かが抱くものであるのに対して、時は特定の誰かに訪れるものではないということであろう。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

外置句は、やはり、*idée* と同じく、《*de*＋不定詞句》が多い。しかし、*idée* とは異なり、《*pour*＋名詞句》も伴っているものも見られた。その場合を別にして集計したのが、表 16 である。

表 16 *le moment* を主語名詞とする外置構文の外置句

外置句	頻度	外置句	頻度	小計
<i>de</i> ＋不定詞句	66	<i>pour</i> ＋名詞句＋ <i>de</i> ＋不定詞句	6	72
<i>de</i> ＋名詞句	3	<i>pour</i> ＋名詞句＋ <i>de</i> ＋名詞句	1	4
			総計	76

《*pour*＋名詞句＋*de*＋不定詞句》においては、名詞句は不定詞句の主語を表している。

(36) *le moment est venu pour nous de nous retirer du monde*

(Honoré de Balzac, *La Cousine Bette*)

(The time has come for us to withdraw from the world)

(我々がこの世から身を引く時が来た。)

また、《*pour*＋名詞句＋*de*＋名詞句》の場合も、*de* の後の名詞句は行為を表し、*pour* の後の名詞句はそれを行う者を指している¹¹。

(37) *A présent, le moment était venu pour elle du "retrait du deuil."*

(Lydie Dooh Bunya, *Une belle traversée*)

(Now, the time had come for her of "withdrawal from mourning".)

(今、彼女の「喪明け」の時が来ていた。)

以上より、《*Le moment est/était venu de*＋不定詞》というパターンの出現頻度が高く、何かをする時になったことを表す定型表現として定着していると考えられる。そして、この表現に基づいて、以下のような変異により、他の表現が生じていると考えられる。

(38) 主語名詞を時を表す他の名詞 (*heure* や *temps* など) に替える。

(39) 主語名詞に付く定冠詞を他の限定辞に替える。

(40) 動詞を到来を表す他の動詞 (*arriver* など) に替える。

(41) 前置詞 *de* の後を名詞句に替える。

(42) 《*pour*＋名詞句》を追加する。

2.8. まとめ

動詞が *venir* の前置詞句外置構文においては、以下のような特定の語彙項目を含む表現が、定着度の高い定型表現として存在している。

(43) L'idée me/lui vint de+不定詞

(44) Le moment est/était venu de+不定詞

これに基づいて様々な変異形が生じているが、それぞれの出現頻度は低くなる。そのような変異形の中には、作家の個人的文体であるものもある。

3. その他の前置詞句外置構文

前置詞句外置構文には、前節で見てきたものとは異なるパターンのものもある。そのうち、前節で見たものと類似した《l'envie me prit de+不定詞》と、それらとはかなり異なった量を表す述語を有する前置詞句外置構文に触れる。

3.1. l'envie me prit de+不定詞

前節で見た前置詞句外置構文の主語名詞としては出現頻度が 5 回で 7 位の envie は、《l'envie me prit de+不定詞》という定型表現でよく使われる。これは、外置句の《de+不定詞》で表された行為をしたくなったことを表す表現である。

(45) L'envie la prit de courir le rejoindre, de se jeter dans ses bras, de lui dire : « C'est moi, je suis à toi ! » (Gustave Flaubert, *Madame Bovary*)

(She got the urge to run to catch up him, throw herself into his arms, say to him, "It is me, I am yours !")

(彼女は、彼に追いつき、その腕の中に飛び込んで、「私よ、私はあなたのものよ！」と言いたくなった。)

ここでは、動詞 prendre は他動詞として使われていて、経験者が直接目的語で出てきている。しかし、prendre には欲求などが起こることを表す自動詞用法があり、その場合には経験者は間接目的語として表される¹²。

(46) l'envie leur prend d'aller voir l'hôpital de la Pitié, qui est très-proche.

(Jules Janin, *Une des misères de la vie parisienne*)

(they got the urge to go to see the Pitié Hospital, which is very close.)

(彼らは近くにあるピティエ病院を見に行きたくなった。)

ただし、経験者が 1・2 人称の場合には、直接目的語代名詞と間接目的語代名詞が同じ形式になるために区別がつかない。実際の用例においては、経験者が 1 人称単数である場合が多いので、区別できない場合が多い。

Corpatext で、《l'envie+1～5 語+de/d'/du/des》のパターンの文字列を検索し、その中から外置構文を採集したところ、使われている動詞は表 17 のようになった。

表 17 l'envie を主語名詞とする外置構文の動詞

動詞	頻度	動詞	頻度
prendre	22	passer	1
venir	4	posséder	1
reprendre	2	tenir	1
démanger	1	総計	32

venir の 4 例に対して prendre は 22 例と多い。《l'envie me prit de+不定詞》は《l'idée me/lui vint de+不定詞》と関連しているものの、それに基づいた表現ではなく、それとは別に定着している表現であると考えられる。

3.2. 量を表す述語を有する前置詞句外置構文

現代のフランス語においては、量を表す述語を有する前置詞句外置構文がよく見られる。その中でも最も目につくのが、être grand (大きい) の場合である。以下の例は、LexisNexis Academic のフランス語ニュースデータベースから採取したものである¹³。

- (47) la tentation est grande de ne plus rien faire. (Le Télégramme, 28 janvier 2015)
(The temptation is great not to do anything any more.)
(もう何もしたくないという気持ちが大きかった。)
- (48) Le risque est grand de le perdre. (Marianne, 2 janvier 2015)
(The risk is great to lose him.)
(彼を見失うおそれが大きい。)

実際の用例を観察すると、(47)や(48)のように主語名詞が tentation や risque のものが多く、以下のパターンが定型表現として定着していると考えられる。

- (49) La tentation est grande de+不定詞
(50) Le risque est grand de+不定詞

それ以外の名詞は頻度が低くなるが、danger、surprise、difficulté のような抽象名詞であり、具象名詞は現れない。これと連動して、述語 être grand (大きい) の意味も、物理空間における大きさではなく、むしろ程度の高さを表している。

しかし、Corpatext で《être の 3 人称単数形+grand+de》のパターンを検索し、外置構文を抽出したところ、16 例しか採取できなかった¹⁴。この表現は比較的近年に使用が増加したようである。

それに次いで目につくのは、être nombreux (多い) である。

- (51) Les exemples sont nombreux de ces interactions. (Sud Ouest, 17 novembre 2014)
(There are many examples of these interactions.)
(これらの相互作用の例は多い。)

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

(52) Les occasions sont nombreuses de nous rassembler.

(Ouest-France, 5 décembre 2013)

(There are many occasions to gather.)

(私たちが集まる機会が多い。)

これについても主語名詞に偏りが見られ、(51)や(52)のように *exemples* や *occasions* が多く、以下のパターンが定着していると考えられる。

(53) Les exemples sont nombreux de + 名詞句

(54) Les occasions sont nombreuses de + 不定詞句

しかし、Corpatext では、使用例が見つからなかった。

être nombreux の類義表現である *abonder* (たくさんある) も、*être nombreux* ほどではないにしても、やはり、外置構文で現れる。

(55) les exemples abondent de cette reprise en main (Le Temps, 10 décembre 2013)

(the examples abound of this takeover)

(このような支配の例はたくさんある。)

やはり、(55)のように主語名詞が *exemples* である用例が多く、以下のパターンが定着度が高いと考えられる。

(56) Les exemples abondent de + 名詞句

Corpatext では、やはり、使用例が見つからなかった。

量を表す述語を有する前置詞句外置構文は、いずれも、主語名詞に偏りが見られ、特定のパターンが定着度の高い定型表現になっていると思われるが、比較的近年に増加したものと考えられる。

4. 本稿のまとめと今後の課題

前置詞句外置構文は、特定の語彙項目を含む特定のパターンのものが使用頻度が高く、定型表現として定着していると考えられる。これに基づいて様々な変異形が生じているが、それぞれの出現頻度は低くなる。これは、前置詞句外置構文の抽象的なパターンだけが存在して、そこに語彙挿入をしていくというモデルとは相入れ難いものである。また、焦点や情報の重要度のような一般的な要因からも、このようなことを説明するのは難しい。前置詞句外置構文のこのようなあり方は、用法基盤モデルに合致したものである。

本稿で扱った前置詞句外置構文は一部であり、その全体像を解明していく必要がある。関係節外置構文など他の構文との関係も残された課題である。また、本稿は構文文法的な立場に立っているが、前置詞句外置構文について生成文法や機能文法などで扱われてきた諸問題が構文文法的な枠組みでどのようにとらえ直されるのかも今後の課題である。

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

-
- 1 外置構文の代表的な研究者であるフランスの Guéron は、Guéron (1978) において、前置詞句外置構文はフランス語よりも英語で普通であるとして、例文をほとんど英語であげる一方、フランス語については英語と同じ制約が働いていると仮定すると述べるにとどめている。Guéron (1980) も、注 3 でフランス語の前置詞句外置構文の例文をあげているだけで、フランス語についてはむしろ非人称構文を取り上げている。
 - 2 用法基盤モデルをフランス語の構文に適用した研究としては、非人称構文を中心に扱った Achard (2015) がある。
 - 3 <http://www.lexique.org/public/corpatext.php>
 - 4 Lakoff (1993) は、That idea came to me. のような表現を、思考を外部から頭に入ってくるものに見立てる THOUGHTS ARE EXTERNAL OBJECTS metaphor に基づくものとしている。
 - 5 ordre は、《avoir ordre de+不定詞》や《donner ordre de+不定詞》のような熟語もあり、限定辞無しで使われやすい傾向があったと思われる。
 - 6 (15) に出てくる「七頭のやせた雌牛の時」というのは、旧約聖書創世記に出てくるヨセフが解き明かしたファラオの夢にもとづく表現であると考えられる。通常は、les sept vaches maigres (七頭のやせた雌牛) で飢饉や窮乏を意味するが、押韻のために vaches を génisses に言い換え、語順も変えたと推測される。
 - 7 ロシア語の原文では、Наступила эра ... のように、「来た」という動詞を文頭にだし、その後に主語の「時代」が来るという倒置構文になっている。よって、フランス語訳の外置構文は原文を引き写したものではない。なお、この動詞を辞書で引いてみると、例文ではことごとく倒置しており、ロシア語ではこの動詞で倒置するのは普通であると思われる。
 - 8 Lakoff (1993:31) は、THOUGHTS ARE EXTERNAL OBJECTS metaphor (本稿の注 4) のソースドメインでは (i) のように着点が省略可能であるが、ターゲットドメインでは (ii) のように省略不可能であることを指摘している。
 - (i) Rover came (to me) when I called him.
 - (ii) It came *(to me) that I could solve the problem that way.フランス語の思考や感情に関する外置構文でもこれと同じことが起きていると言える。
 - 9 動詞が regaler の場合については、注 10 を参照されたい。
 - 10 (i) の間接目的語代名詞 me は、身体部位 cerveau (脳) の所有者を示す間接目的語である。
 - (i) l'idée me regalopa au cerveau de nos anciennes farces amoureuses avec les satanées béguines des églises d'Espagne.
(Jules Barbey D'Aureville, *Les Diaboliques*)
(The idea rushed back into my brain of our old love farces with the damned Beguines of the Spanish churches.)
(スペインの教会の忌まわしいベギン会修道女たちとの古い恋愛の茶番のことが私の脳裏に急に戻ってきた。)しかし、間接目的語代名詞の指示対象が考えを抱いた人間であることに変わりはない。

-
- 11 (37)の引用符および引用符とピリオドの位置は原文通りである。
12 (46)で、très を次に来る語とトレ・デュニオン（ハイフン）でつないでいるのは、古い正書法である。
13 <http://www.lexisnexis.com/ap/academic/>
14 Corpatext においては、主語名詞は surprise が若干多いが、それ以外は 1～2 例で、偏りは確認できなかった。

表 述語が être grand の外置構文の主語名詞 (Corpatext)

主語名詞	頻度	主語名詞	頻度
surprise	4	bonheur	1
étonnement	2	impatience	1
nombre	2	imprudence	1
tentation	2	plaisir	1
audace	1	pouvoir	1
総計			16

参考文献

- Abeillé, Anne. (1994) Syntax or Semantics? Handling Nonlocal Dependencies with MCTAGs or Synchronous TAGs. *Computational Intelligence* 10(4) : 471-485. Blackwell.
- Achard, Machel. (2015) *Impersonals and other Agent Defocusing Constructions in French*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamin.
- Croft, William and D. Alan Cruse. (2004) *Cognitive Linguistics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Culicover, Peter W. and Michael S. Rochemont. (1990) Extraposition and the Complement Principle. *Linguistic Inquiry* 21(1) : 23-47. MIT Press.
- Göbbel, Edward. (2013) Extraposition of Defocused and Light PPs in English. Gert Webelhuth, Manfred Sailer and Heike Walker (eds) *Rightward Movement in a Comparative Perspective*, pp.399-438. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Guéron, Jacqueline. (1978) Une contrainte sur l'interprétation de phrases contenant NP et PP. *Cahier de linguistique* 8 : 181-204. Les Presses de l'Université du Québec.
- Guéron, Jacqueline. (1980) On the Syntax and Semantics of PP Extraposition. *Linguistic Inquiry* 11(4) : 637-678. MIT Press.
- Gunnarson, Kjell-Åke. (1982) Trois constructions à dépendance entre sujet et PP. *Linguisticæ Investigationes* 6(1) : 45-81. John Benjamin.
- Huck, Geoffrey J. and Younghee Na. (1990) Extraposition and Focus. *Language* 66(1) :

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。

- 51-77. Linguistic Society of America.
- Hunter, Tim and Robert Frank. (2014) Eliminating Rightward Movement: Extraposition as Flexible Linearization of Adjuncts. *Linguistic Inquiry* 45(2) : 227-267. MIT Press.
- Lakoff, George. (1993) The Syntax of Metaphorical Semantic Roles. James Pustejovsky (ed) *Semantics and the Lexicon*, pp. 27-36. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Lakoff, George. and Mark Johnson. (1999) *Philosophy in the Flesh: the Embedded Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. (2000) A Dynamic Usage-Based Model. Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds) *Usage-Based Models of Language*, pp.1-63. Stanford: CSLI Publication.
- Radford, Andrew. (1988) *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Sportiche, Dominique. (1981) Bounding Nodes in French. *The Linguistic Review* 1 : 219-246. Foris Publications.
- Takami, Ken-Ichi. (1990) Remarks on Extraposition from NP. *Linguistic Analysis* 20(3-4) : 192-219. Elsevier.
- Takami, Ken-Ichi. (1992) On the Definiteness Effect in Extraposition from NP. *Linguistic Analysis* 22(1-2) : 100-116. Elsevier.

これは著者原稿です。引用の際は出版社版を参照してください。